News Letter 第 8 号 2012 年 3 月 1 日発行 発行人 主教 加藤博道 編集人 司祭 中村 淳







# あしたに向かって



2011年3月11日から1年が経とうとしています。しかし、まだ時間では測ることのできない現実が重く横たわったままです。「私たちはどう生きて行けば良いのか」という問いは、あの時から一歩も私たちを引き離してくれないのではと感じてしまいます。それでも人は強い。あちこちで「それでも生きていかねば」と多くの方々が前に進もうと立ち上がっています。プロジェクトがかかわりを与えられた方々からも、そんな思いが寄せられています。3月11日を挟んで2回シリーズで、徐々に、しかし確実に見え始めた「希望」を各地からお伝えできたらと願っています。

### 3・11 一周年を迎えて

いっしょに歩こう!プロジェクト 代表 主教 ナタナエル 植松 誠

昨年3月11日以来、「神さま、あなたはいったい何故・・・・」という祈りをどれほど 口にしたことでしょうか。被災者の方々にとっては、絶望から這い上がることもできない状 況の中、あまりにも残酷な一年であったと思います。悲しみ、嘆き、憤りを、はちきれんば かりに胸に収め、それでも生かされていることに感謝し、隣人を助けようとする心をもった 被災者の方々。その心にすがるようにプロジェクトのスタッフの方たちもボランティアの方 たちも動かされてきたのだと思います。一夜にして家族を亡くされた方々の悲しみに添うこ とは到底できません。ただただ、神さまがその方たちの傷に触れ、癒してくださることを祈 るのみです。

けれども、想像を絶するこの地獄のような状況の中で、どうして人とはこれほど強く温かいものなのだろうかと、信じられない感動を覚えることも多々ありました。確かにそのような状況ですから、互いに傷つけ合い、争い、怒りをぶつけ合うこともあったでしょう。しかし、そのような中にも、「労り」という、人に与えられた愛の衝動はそこかしこに溢れていました。自分にとって大切だと思ってきたこと、これがなくては生きていけないと思っていたそれまでの価値観が、この大震災で根底から覆されました。そして、人間にとって本当に大切なものは目に見えるものではないことを思い知らされました。特に、子どもたちや青年たちは、今までの自分の主張を通すことだけに目を向けるのではなく、自分以外の人たちのことを「考える」、「助ける」行動に出だしたように思います。

失ったものは大きい。そして深い悲しみは永遠に消え失せることはないでしょう。しかし、その地獄の中で、人として歩こうとする凛とした姿を私は多く見ました。信仰者であっても、信仰者でなくても、人を創造された主は、計り知れない慈しみをもって、力を与え、分別を与え、愛を与える・・・・、そのように感じます。「いっしょに歩こう! プロジェクト」も試行錯誤の中、今まで守られてきました。何もかも充実している訳ではなく、不完全で、時には失敗も繰り返してきました。しかし、スタッフ、ボランティアは、それぞれの最優先すべきことを後ろに回して、被災地に身を置き、被災された方々と関わろうとしておられます。五つのパンと二匹の魚をイエス様に捧げた男の子のように、そのささやかな捧げものを祝して用いていただけることを信じての結果なのです。その姿にも私たちは大いに励まされます。絶望の暗闇の中に、このような「労り」が生まれ、人間が本来、最も必要とする賜物として私たちの中に、そして日本の社会に浸透していくなら、確かに何かが変わっていくような気がします。

亡くなられた多くの方々のことを思う時、言葉を失います。もっと生きていたかったことでしょう。もっともっと家族と過ごしたかったことでしょう。この一年間、神さまを呪いたくなるほどの思いの中で抱えてきたこの悲しみに代えて、これからの私たちは、人に与えられている「愛」と「労り」の賜物で、回復の道を捜し求めていきたいと願います。

#### 「あの日から一年、今思うこと 釜石神愛教会 高橋仁美

東日本大震災から約一年が経ち、今日までの 日々が早かったのか、長く感じたのか、今もよ く分かりません。当時走り書きに取っていたメ モノートを見ると、私の勤める保育園のことに ついては多少思い出せるのですが、あの時どん なことを感じ、どのように思っていいたのかは、 正直言って、ほとんど覚えていないのです。 只々毎日を過ごしていたように思います。

私は、普段から地震の心配だけはしていましたが、震災時の2回の大揺れには本当に驚き、 園舎倒壊の不安を感じました。津波のことなど 想像さえせず、施設長としての危機管理能力に は欠けていたと思います。しかし、職員の行動 は冷静で、日頃の訓練の成果が表れていました。 避難所でも、最後の子どもを保護者に渡すまで 職務を遂行し、あの日から今日までずっと、園 の子どもたちや保護者の方々のため、地域の皆 さんのために少しでも役立ちたい、と頑張って います。園の中には多分震災前と変わらない程、 笑顔と元気な笑い声がいっぱいになっていま す。



でもその反面、この釜石で各自が抱えている 悲しみ、嘆きや苦しみは、この一年の間に少し ずつ癒されてきたのだろうとは思いますが、無 くなるはずはなく、本当の元気を取り戻すため には、長い長い時間が必要なのだと思っていま す。あの日から一年、「今まで自分は何もして こなかったのに、こんなにしていただいていいのだろうか。」といつも思うのですが、教会関係者を始め、全国、世界の皆さんからは、物資の支援、たくさんの優しさと励ましをいただきました。今まで知らなかった人たちに出会い、助け合うことを知り、心の繋がりを感じることができました。感謝の気持ちでいっぱいです。これからも、釜石の未来を担う子どもたちの笑顔のために、釜石神愛教会・神愛幼児学園の新しい夢と希望を叶えていくために、みんなで助け合って、励んでいこうと思っています。

## 「震災一年が過ぎ、今思うこと」 スタッフ 執事 バルナバ 岸本 望

北関東教区よりプロジェクト仙台オフィスに派遣され、早7か月が過ぎました。担当する宮城県石巻市街を訪問する度に、がれきの山から立ち上る煙と、物が腐った匂い、至る所に入り込んでくるハエに悩まされた暑い夏は、とても遠い日のようです。さらにあの3月11日は、随分と昔のように感じられます。しかし、目の当たりにする被災地の景色は、私の実感とは違って震災後11か月経っても何も変わっていないところもあります。遠く栃木から仙台圏にやってきており、週末ごとにすっかり以前と変わらない所に戻る私と違って、そこに住み続けるしかない被災者さんの思いは、如何ばかりかと胸が痛みます。

1995年1月17日の阪神・淡路大震災での出会いが、私の聖職への召命への原点です。高校3年生だった私は、芦屋聖マルコ教会を拠点に行われていた支援活動に参加しました。ある被災者さんとの出会いが、私の原点です。やや冷めていた教会への眼差しが、希望へと変えられたこと、そして死と生の現場で働き続ける決意へと導かれたことを思い起こします。余りの出会いの強烈さに根性は折れ、中途半端に去ったことをも苦く思い起こします。

今、再び大震災の現場で働かせていただく機 会が与えられました。信じがたいほどの光景と、 全てを失った人々の悲しみを前に、私は再び立 ち尽くします。果たして私の為そうとしている ことが、被災者さんの本当にお役に立つことな のか悩みます。しかし聖職とされた今、十字架 と復活について、人々に告げ知らせる賜物をい ただいた今、どんなに困難があっても、私の現 場には既に主イエス・キリストが働いておられ るという確信があります。人々が思いもよらな い仕方でつながり、絶望が希望へと変えられる 奇跡を目の当たりにしています。今までの経験、 知識、世に言うノウハウ等はまるで役に立たな い現実の中で、「イエス様が出会い続けられた ように、私も出会い続けたい」。プロジェクト を覚えて祈り支えてくださる皆様のおかげで、 神様から多くの恵みをいただき、今日も働いて います。

### 「今思うこと」 小名浜聖テモテ教会 関 洋美

3月11日の震災から一年が経とうとしている今、3月12日には、断水になってしまったため5時間も行列に並んで水を確保したり、福島原発の放射能の問題で、いわき市は、老人と体の不自由な方、医療関係の人たちなど、避難できない人のみが残っていた静かな2週間だった、等等、この一年間、アットいう間にすぎてしまったような、またとても長かった様にも思われる、何ともいいようのない日々だった様にも思われます。しかし、この一年いろいろなにも思われます。しかし、この一年いろいろなっての教区を越えた全国的なご支援、ご協力には、心から、いつも、いつも感謝申し上げます。小名浜支援センターにも、現在まで、またこれ

からも、数えきれない皆様方からの人的ご支援、 精神的ご支援、物資面でのご支援をいただいて おります。

福島原発避難地区から、いわき市内の仮設住 宅に入居している方々に対する「ほっこりカフ エ」の開設日には住民の方々が心待ちにして下 さって、楽しみにいやしの一時をすごされてい ます。ありがとうございます。小名浜聖テモテ 教会の教会生活、幼稚園にとっても、この一年 は、今までに経験したことのない、大変感動的 な一年をすごすことができました。3月に実施 できなかった幼稚園の卒園式は、4月に入って からでしたが、卒園児全員が参加できて聖堂で、 沢山のボランティアの方々もご一緒に、祝福し て下さって、子どもたちの門出を素晴らしい思 い出にできました。また、幼稚園創立50周年 記念礼拝も6ヶ月おくれでしたが、11月3日 にお献げすることができました。12月のクリ スマスも、加藤東北教区主教様が司式をして下 さって、歌ミサで素晴らしく心に響く祈りを献 げることができました。震災によって失ったも のも沢山ありますが、皆様との深い絆を得るこ とができました。先の見えない部分もまだまだ ありますが、福島県いわき市に生活して行く私 たちは一歩一歩あせらずに『新生』『フッコウ』 して行きたいと思います。沢山の方々からいた だきました『愛』に、心から感謝しています。





「いっしょに歩こう!プロジェクト」事務局

【open】月~金 10:00~17:00 【close】土·日·祝

〒980-0803 宮城県仙台市青葉区国分町 3-4-5 クライスビル 2F

TEL: 022-265-5221 FAX: 022-748-5321

E-mail:walk@nskk.org URL:http://www.nskk.org/walk/